

「あのさ、昨日、書類のコピー頼んどいたはずだよな？」

今日も上司のイラついた声で1日が始まる。

派遣社員——いわゆる「非正規」と世間では哀れみをもって語られることが多い職種。

それが私の立場だ。

だけど、こんなご時世、職があるだけマシ……なんだろうけど、胸の中では「誰か、この息苦しい毎日から助け出して！」と叫ぶ自分がある。

でも——

「ふっ、30を目の前にして、今さら白馬の王子様症候群でもないでしょ」

と嘲（あざけ）る自分もいて、結局変わり映えのしない毎日がただただ繰り返されていくだけ。

そういえば小学校高学年の頃、いじめられていた私を助け出してくれた男の子がいた。

名前は……そう、珍しい名字だったから未だに覚えている。

阿久津くん。

残念ながら下の名前までは覚えていない。

彼は優等生……というわけではなかったけど、常にクラスを中心にいるような男の子だった。

一方私は運動ができるわけでもなく、成績もパツとしない。

そして容姿だって並。

そんな中途半端でなんの特徴もない……今ならモブキャラと呼ばれるような、「女子その10」くらいの存在。

ほら、クラス替えの後、ゴールデンウィーク明けくらいになっても同級生から「えーと……何さんだったっけ？　ここまで出かかっているんだけど！」と困ったような顔で話しかけられる子が、どこのクラスにもいたでしょう？

それが私。

そんな中途半端で悪（わる）目立ちすらない私が、何のキッカケがあったのか、クラスの女子にいじめられるようになった。

キッカケなんてものはそもそも何でも良くて、ただイケニエになる対象が誰かいればいい。そんな幼くて残酷な遊戯だった気がする。

話しかけてもシカトされる。

聞こえよがしに嫌味を言われる。

そんなよくあるデキゴト。

ニュースで取り上げられるようなイジメに比べれば、ただ時が過ぎてゆくのを待っていればいいだけの、他愛のないじゃれ合いでしかなかった。

なのに、阿久津くんはイジメられてる私以上に怒りを露わにした。

正直私の方が引いてしまうくらいの勢いで。

「おまえらいい加減にしろよ！」

昼休みの教室。突然の大声に誰もが一瞬身を強ばらせた。

「いつもいつも、あいつのこと仲間ハズレにしやがってさ！ 見ててムカつくんだよ」
待って、待って。

べつに私、仲間に入れて欲しいなんてこと、ひと言も言ってないのに。

むしろ注目なんかされたくないのに……ほら、クラス中の視線が私に集まっているのがわかる。

はやし立てる男子達。

「なんだ、おまえら、デキてんのー!？」

ませた男子の声が飛ぶ。

こんなの、シカトされてる方がずっとマシ。いたたまれなくて、その場から逃げ出したかったのに体が動かなかったことを今でもハッキリと覚えている。

放課後、早々と教室を飛び出そうとする阿久津くんを、わたしは呼び止めていた。

呼び止める？

そんな可愛らしいものじゃない。

たぶんあの時の私は思いっきりムツとして、抗議の色を露わにしていたはずだ。

「なんで助けたの？ 余計なことしないでよ」

自分に叩きつけられた言葉の辛辣さに、阿久津くんが面食らうのがわかったけれど、次の瞬間、阿久津くんはこれ以上無いくらいの笑顔で答えたのだ。

「理由？ そんなの必要か？」

今度はこっちが言葉に詰まる。

理由もなく助けたの？

「だってオレの将来の夢、ヒーローだから。ヒーローであることに理由は必要ないし、ヒーローは弱いヤツを助けるもんなんだよ。もし困ってることがあったら、俺に言えよな！」と屈託なく笑って走り出す彼を、わたしはポカーンとした顔で見送っていた。

幼稚園児でもあるまいに、ヒーローごっこ……？

そうだ。珍しい名字という以上に、自分をヒーローだという突拍子のなさが、彼という存在を未だに私の記憶の中に残していたのだ。

あれから十数年が経った。

「白馬の王子様はまだしも、今この歳になってヒーローに助けられても、ね……」

思わず脳裏に戦隊ヒーローの格好をした阿久津くんの姿が浮かんだ。

私と同じく 30 を目の前にして、ぽてんと少しお腹の出た阿久津くんが戦隊ヒーローのポーズを取っているのを想像して思わず吹き出してしまう。

我ながらいくらなんでも失礼でしょう。

もしかしたら鍛え上げた見事なボディをしている可能性だってあるだろうに。

ふと、目の前のパソコンの検索窓に文字を打ち込んでみる。

「阿久津 ヒーロー」

こんなざっくりとした検索ワードでヒットなんかするわけがないと思っていた。

なのに、とある小さなヒーローショーのホームページがヒットした。

よくある町おこしのためのご当地ヒーローだ。

そこには代表者兼ヒーローとして「阿久津 健」という名前が載っていた。そしてさらに読み進めていくと、そこには年こそ経たものの、あの日の阿久津くんの面影を確かにたたえた青年がいた。

それで……阿久津くんだったからといってどうする？

会いに行く？

小学生の頃はありがとうございました。あの時はお礼も言えずにごめんなさい。

……なんて今さら言われても向こうだって困るに決まっている。

そもそも彼のことを思い出したのは単なる気まぐれで、小学校を卒業し、地元を離れてからこっち阿久津くんのことなんて思い出したこともなかった。

なのに――

週末、お客さんもまばらな遊園地、ヒーローショーのステージを最後部の席からぼんやり眺めている、わたしがいた。テレビで放送しているようなメジャーなヒーローじゃないから、客席だってガラガラだ。

なのに全身黒タイツの悪の戦闘員に向かってキックを放つヒーローに対して、子どもたちがキラキラとした眼差しを送っている。

「がんばれー！」

彼はヒーローになるという夢を叶えたんだ。

小さいけれどヒーローショーという舞台の上で今、必死に全力でヒーローをやり続けているんだ。

「ね……阿久津くん、今度もまた私を助け出してくれる？」

聞こえるはずもないつぶやき。

だけど、一瞬ステージの上の阿久津くとマスク越しに目があつた気がした。

その目は「もちろんだろ！ オレはヒーローなんだから！」と、あの日の阿久津くんそのままに熱っぽく語りかけていた。